

して広く県内に周知し、本県の教育の振興に結び付けることを目指していく。

2 研究の方法

研究の方法を次の4点とした。

(1) Microsoft Teams (以下Teams) を利用した授業の振り返り・教材検討

推進校と本センターとの物理的な距離を埋め、短時間で効率よく打ち合わせや情報共有を行うために Teams 上にチームを作成する。Teams の利用に際しては、担当指導主事と授業担当者で授業の振り返りや、教材の改良ポイントなどについて情報交換が容易に行えるように工夫し、生徒の実態に合わせて、授業の方法を柔軟に調整・変更しながら研究を進めていく。

(2) オンラインミーティングの活用

協働研究を進めるため、授業担当者と本センター指導主事でオンラインミーティング(図1)を設定する。アンケート結果の分析や授業の振り返り、次の授業のポイントなどについて情報共有する場を持つことで次のステップへの方策を検討したり、他のクラスの取組の進捗状況を聞き取ったりできるようにする。



図1 オンラインミーティングの様子

(3) 授業参観・研究協議の実施

授業参観・研究協議を実施し、授業後の協議では先生方自身が言葉に出して振り返りをする事で、授業の評価や課題について共有し、よりよい授業に向けた方策を検討できるようにする。

(4) 事前事後アンケートの実施(資料1)

研究の事前・事後の変容を見取るため、1年次生の生徒及びその授業を担当する教員をそれぞれ対象とし、Microsoft Forms(以下 Forms)を用いてア

ンケートを実施する。実施時期については、取組が始まって間もない7月と取組後の12月の2回とし、変容を検証する。質問は、「現状把握」の項目と「キャリア教育で身につけさせたい基礎的汎用的な力」の項目で構成し、「キャリア教育で身につけさせたい基礎的汎用的な力」に関する質問は、中央教育審議会の答申「キャリア教育の新たな方向性」資料に基づいて作成する。各質問においては、重要度の認識の度合いを問うものと実践の度合いを問うものの2種類あり、それぞれ肯定・否定の回答の割合を明確にして分析する。2回のアンケートの結果から、生徒及び教員それぞれの現状認識や価値観の変容を把握し、研究の進め方や授業の在り方を考察する。

研究体制について

推進校からのニーズに応えつつ、研究の目的を達成するために、今年度は1年次の「産業社会と人間」の授業に特化して研究する。

開始当初、授業担当者からは、新しい教材について「目の前の生徒に対して手直しする必要がある」「生徒がこの授業の必要性をいまひとつ理解していないと感じる」「グループ活動と個人活動のバランスを調節することが必要」「大きすぎる課題設定だと生徒はイメージが湧きにくい」「答えが一つではないため、担任の主観が入りやすい。どう誘導するか悩む」といった声があがった。これらを改善し、生徒のより深い学びへと繋げるために、「教材や指導の改善に向けての模索・検討」「学びのコミュニティづくり」の2本柱を掲げて体制づくりから始めた。

最初に本センター指導主事と、授業担当者である研究推進校1年次に所属する6名の教員で Teams のチームを構成し、オンラインミーティングの開催を可能にする。同時に授業の単元計画や1時間単位の展開を授業に先立って検討し、授業担当者に提案する主担当者とのやりとりを、1年を通して行う。主担当者から徐々に輪を広げていくイメージで、学びのコミュニティづくりを推進する。

支援の経過と取組について

1 取組の概要

5月に行われた最初の授業参観及び研究協議において、先生方の新しい教材への戸惑いや悩みが

確認できた。その内容を踏まえ、1回目のアンケートを【現状把握】の項目と【キャリア教育で身につけさせたい力】の項目で構成して実施した。その分析から、生徒の現状として課題のある部分について手立てを検討し、実践に繋げた。

課題として着目した1つ目は、「授業の目標を理解した上でゴールを意識して授業に参加しているか」という点である。生徒側は69.3%が「ある程度以上」目標を理解していると回答しているのに対し、教員側は否定的な回答が半数以上と認識に相違が見られた(資料4)。

2つ目は「自分の能力を高めるために、忍耐強く物事に取り組んでいるか」「問題点について、振り返って改善をはかろうとしているか」の項目についても生徒側と教員側の認識に差が生じている点である。生徒側の肯定的な回答はそれぞれ61.2%、88.7%(7月のアンケート結果より)であったのに対し、教員側はどちらの項目とも6人中5人が否定的な回答となっていた。

この結果を受け、生徒に「目標」と「ゴール」を意識させる振り返りシートの導入を本センターから提案し、オンラインミーティングや研究協議の中で検討を重ね、目標やルーブリックを1枚のシートに掲載する形式にして活用することとなった(図2)。

振り返りシート「バイタリティ探究」フェイズ4

「産業社会と人間」振り返りシート 姓 名 氏名
 バイタリティ探究 フェイズ4(私の未来をどのように創っていくのか)
 ※授業の最初に目標を確認し、意識しよう!
【フェイズ4】

STEP1	自分の未来物語を妄想する	
目標	自分の未来物語を妄想する ※「興味あること」「未来」をつなげて考えることで、自分の興味関心を深めることができる ※未来の生活を良くするアイデア(道具やツール)のアイデアの場を分かち合い、実践することができる	自分の未来物語を妄想する ※「興味あること」「未来」をつなげて考えることで、自分の興味関心を深めることができる ※未来の生活を良くするアイデア(道具やツール)のアイデアの場を分かち合い、実践することができる
	生徒の記述 (考えたこと・気づき等)	A・B・C

自分の興味関心のあることと未来を繋げて考えられましたか?振り返りを!

知識・理解	思考・判断・意図	感情・態度・行動
A: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。 B: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。 C: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。	A: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。 B: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。 C: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。	A: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。 B: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。 C: どのようになりたいか、その理由も考えてみる。

図2 振り返りシートの提案

また、単元ごと、1時間ごとの授業で目標に向けた活動・学びをいかに進めていくかを検討するべく、Teams による主担当者とのやりとりを重ねた。授業前にポイントとなる箇所や生徒の学びを深める発問・展開について意見を交わし、実施後に振り返ることを繰り返した。参観の際には研究

協議を実施し、授業担当者全員で振り返りをおこなって次のステップへの方策を検討した。

2 授業参観・研究協議

年間を通して授業の参観・研究協議を3回(5月・9月・11月)12月の総合学科発表会、2月の授業公開にそれぞれ参加した。年度当初の5月の参観時には、教員・生徒ともに教材への戸惑いもあり、1人1台パソコンもない状態でグループ活動における共有にも制限があった(図3)。「何のために活動しているのか」といった目標が意識されず、教材の意図が十分生かしきれていない状況であった。

産業社会と人間「バイタリティ探究」授業の様子【5月】



図3 「バイタリティ探究」授業【5月】

9月になると、教材の回を重ねるごとに生徒が活動に慣れて主体的に動けるようになっていく様子を見取ることができた(図4)。振り返りシートの導入(図2)によって生徒自身にメタ認知の効果が現れ、目指す姿を意識できるようになったとの声が研究協議においても寄せられた。また、1人1台パソコンの活用により、グループ協議が活性化されるなど授業に変化がつかると同時に、じっくり自分で考える時間も大切にされていた。

産業社会と人間「バイタリティ探究」授業の様子【9月】



図4 「バイタリティ探究」授業【9月】

11月の参観の折には、授業は更にブラッシュアップされており、生徒のことをよく理解している

担任が、クラスの特性に合わせて切り口を工夫していた。それにより、生徒の授業への興味関心や意欲も喚起されていると感じた（図5左）。

山梨大学アドバイザーからは「生徒も教員も少数・小規模であることの良さを生かし、強みにすることもできる」といったアドバイスをいただき、研究協議においては「生徒に目指すところを意識させる大切さ」「2極化する生徒への対応」「振り返りシートの効果」などについて意見交換した。授業を「見せること」や「言葉にして振り返る」ことにより、先生方も授業も確実に目指す方向へと変化を遂げていると感じた（図5中）。

2月の授業公開においては、「未来を実現するための思考の広げ方を知る」という目的で、自分たちが考えた「未来の家電製品」についての宣伝会議を行い、ポスターを完成させる授業を実施した。生徒たちは1人1台パソコンで情報共有をしながら、見事にポスターを完成させていた（図5右）。また、この日は初対面の大人が各グループに入る形でのグループワークであったが、自分の考えをしっかりと述べて話し合う姿が見られた。



図5 「バイタリティ探究」授業【11月】

3 研究推進校：上野原高校から

推進校からは、1年間の取組を振り返り、「夢を実現する生徒の育成」に向けて特に意識した点が2つ挙げられている。1点目は、「バイタリティ探究」の教材を学校の実態に照らして活用しやすいようにカスタマイズすることである。用意された指導案に沿って授業を進めても生徒の反応は今一步であったため、ICTの活用部分や生徒に思考を促す問いかけの検討などに力を入れることで改良を重ねた。2点目は、通常の教科と同じく3観点に沿った点数評価が必要な「産業社会と人間」の成績評価についてである。学校独自で一から評価基準を作成し、妥当性や信頼性を確保した。その過程で振り返りシートの導入を決め、目標やルー

ブリックをコンパクトに記載することにより一目で生徒たちが目指すべき姿を共有できるシートを作成し、活用している。

毎年12月に全校をあげて取り組んでいる総合学科発表会においては、1年次生は例年どおり自己の夢を発表する「ドリームスピーチ」を行った。例年以上に原稿の作成もスムーズで、発表も堂々としたものだったとのことである。

研究推進校が力を入れて取り組んだこの2点においては、本センターと協働で模索・検討を繰り返した部分であり、生徒たちの成長に繋がった部分でもあると言える。

研究のまとめ

1 アンケート結果分析

1年次生全員と「産業社会と人間」の授業担当者全員を対象に、取組前の7月と取組後の12月に実施したアンケートの結果を基に成果を検証した。2回の生徒アンケートでは、すべての項目において、1回目よりも2回目のアンケートで肯定的な回答が増加し、取組が生徒の学習や資質・能力の向上に好影響を与えたと言える。

生徒アンケートからは概ね高い評価が得られたが、変容の中で特徴的な部分について取り上げて以下に説明する。

まず、資料2より「生徒たちが社会を生き抜く上で大事だと考える力」についての結果をみると、他者と良好な人間関係を築く力の伸びが目立ち、他者と協力協働して取り組む力とあわせ、他者との関係性を重視する姿勢が一層顕著になった。また、興味深いのは、時間やストレスを管理する力が3位に入ってきた点である。オンラインミーティングで先生方からは、「高校生活の中での実感や、職業人講話などで働く人たちの生の声を聞く中で実感したりするようになった結果ではないか」との分析が寄せられた。

次に資料3より、生徒たちが「産業社会と人間」の授業で身につけたい力としてあげたものを見てみる。「コミュニケーション力」が7月より更に8.1%増えるなど、上位3項目は変化がなかった。一方、「自分の興味関心を理解する力」が減少し、「自分の将来を考える力」が10%以上増加した。これは、授業を通して自己への理解が深まり、その結果「将来へ向かう気持ち」が高まったのでは

ないかと考えられる。

資料4からは、生徒たちが「産業社会と人間」の授業に向かう姿勢について見てみる。「目標の理解」の点において、7月の生徒アンケートで69.3%だった肯定的な回答が12月には82%にまで上昇している。一方教員側も、7月には半数以上否定的な回答だったものが、12月には全員が肯定的な回答に変化している。この結果は、授業での振り返りシートの活用が功を奏し、授業前の目標・目指す姿の確認や、終了時の自己評価といった取組の積み重ねが結果に繋がったものと考えられる。

資料5より、12月のアンケートに追加した「生徒が将来の目標（夢）に向かう気持ちはどのように変化したか」の項目について見てみると、9割の生徒が迷いを持ちながらも自分の進みたい方向性を決めつつある結果となっている。「決まっていない」とした生徒も、記述項目には「進路についてよく考えるようになった」「自分にあった職業を考えることが大事」などと回答しており、そこには考えた上で決め切れていない様子が窺え、ドリカムシステムが目指す1年次生の「夢の探索」という姿は概ね達成された状況が見て取れる。

12月アンケートでの先生方の記述回答（抜粋）

- * 話し合いの場面などで他者との声かけなどに積極的になっている。
- * 自分の進路や卒業後の生活を具体的に考えられるようになった。
- * 幅広い人間関係を築き、コミュニケーションをとっているような気がします。
- * 考える力がついた生徒がいます。
- * 答えがない問いに考えることができるようになった。
- * 前は、生徒たちは自分のことを話したり発信することが苦手だったが、今では通常の授業の中でも、グループワークをやったり、プレゼンテーションをやるのがそこまで苦にはならず、慣れてきている感じがする。

図6 12月アンケート 教員記述

上記(図6)は12月アンケートの教員記述部分である。「積極的」「考える」「コミュニケーション」「発信」といったキーワードが、授業での活動を通して得た力として挙げられている。これらは「探究的な学びの基礎となる姿勢」として、教材を通して育成しようとしてきた部分であり、「自らの夢を実現できる生徒の育成」という研究推進校の研究主題においても、「夢の実現」に向けて必要とさ

れる土台となる力でもある。まだ課題はあるものの、この生徒たちのプラスの変容は評価できるものだと言える。先生方にサポートされながら探究的なプログラムに繰り返し取り組んだことが、こうした成果に結び付いたものと考えている。

最後に資料6より今後の課題となる部分について見てみる。7月のアンケートにおいて、教員側から生徒たちの「忍耐強く物事に取り組む姿勢」や「振り返りにより改善する姿勢」に課題がみられるとされていた。この2点については、12月のアンケートにおいても教員側からは依然として課題となっている。一方、生徒側の結果の変容を見ると、どちらの項目も肯定的な回答が増加している。授業での課題に対する考察や振り返りの実践などにより、生徒たちは自身の取組が改善されてきたと感じ取っているようだ。しかし、これらの肯定的な回答率は他の質問項目に比べると低い状況にあり、まだ課題があるといえる。この2項目については、夢を実現するためにも欠かせない力として、今後その向上に資する改善の手立てを考えていきたい。

2 成果と課題

研究の2本柱とした「教材や指導の改善に向けての模索・検討」「学びのコミュニティづくり」を踏まえ、研究の成果と課題について述べる。

推進校に対する研究支援については、本センターの指導主事が推進校の研究に積極的に関わることで、一定の成果があったと考える。具体的には、Teamsで教材の事前検討・振り返りを継続することで、よりよい授業に向けて「教材を効果的に活用する授業への継続的な支援」ができたことである。また、学びのコミュニティづくりについては、主にTeamsを用いた情報共有やオンラインミーティングの設定により、協働的に考える場を効果的に継続して設けることができた。限られた時間の中で、的を絞った検討・協議を進めることによって負担感を減らしつつ、授業担当者全員が同じ方向を向いて進む中で、それぞれの持ち味を生かした授業を考えていく素地が築けたのではないかと考える。

キャリア教育のブラッシュアップに向けて、推進校が新しい教材の導入に試行錯誤しながら

ら本センターと協働で取り組んだことは、結果的に生徒の学習・意識に好影響を与えることに繋がり、先生方の授業に向かう意識にもよい変化を生んだ。これはこの支援の成果の一つであると考えられる。

今後の大きな課題としては、「産業社会と人間」の授業に特化して行ってきた研究を、他の教科や他の年次にいかに広げていくかという点である。また、生徒たちのより深い学びの実現に向けて、生徒の振り返りから得た知見を教員側がいかに授業づくりに生かしていくかということも課題としてあげられる。1年間の取組から得られた成果を糧として、向上してきた生徒の学びへの意識やスキルをさらにより良いものにしていくために、効果的な「探究的な学びの姿勢を育成する授業づくり」についての研究継続を願う。

3 終わりに

研究支援という形で推進校のキャリア教育における「探究的な学びの基礎となる姿勢」を育成する授業の検討・教材のカスタマイズに携わってきた。研究の取組に真摯に向き合い、よりよい授業に向けて試行錯誤する現場の先生方の姿を目にし、またそれに応えて成長する生徒の様子を垣間見ながら、ひそかに嬉しさを噛みしめる1年間であった。

めまぐるしく変化する社会を、生徒たちが広い視野や自己肯定感を持って生き抜いていくための一歩を踏み出すために、キャリア教育の果たす役割は大きい。そしてそこに「探究的な学び」の要素は欠かせないものである。学校生活のみならず人生においても、よりよく生きていく上で「探究的な学び」の要素は必要である。そこに繋がっていく研究を進めている推進校の実践は、今後教科との連携や、学校全体への広がりを検討・推進していく中で、他校の参考となるものになっていくのではないかと考えている。

本センターの指導主事が先生方の取組を後押しすることで、推進校が「探究的な学びのスキルアップ」に向けて授業やキャリア教育のブラッシュアップを図り、生徒たちのより深い学びを引き出していくためにも、私たち自身が一層の研鑽を積み、現場の先生方とともに試行錯誤しながら今後の研究に当たって

いきたい。

最後に、1年間「課題」に向き合い、本センターの指導主事とともに協働研究に取り組んでいただいた推進校である上野原高校の先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。

【参考文献】

- 高等学校学習指導要領（平成30年告示）
- 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編
- 文部科学省『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開（高等学校編）』（2023）（株式会社アイフィス）
- 中央教育審議会答申（平成23年1月）「キャリア教育の新たな方向性」資料編
- 中学校・高等学校キャリア教育の手引き - 中学校・高等学校学習指導要領（平成29年・30年告示）準拠（令和5年3月）

【研究協力校】

山梨県立上野原高等学校 校長 小笠原 宏

【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 小川 弘一
山梨大学 客員教授 井上 孝悦
山梨大学 客員教授 小林 智

【総合教育センター研究アドバイザー】

学校運営支援統括幹 手島 俊樹
県立次長 藤巻 理恵
研修指導課長 藤原 千鶴

資料1 アンケート項目

アンケート項目【7月・12月共通】

- Q1. 「産業社会と人間」の授業に興味や関心を持って臨んでいるか。
 Q2. 授業の「目標」を確認し、それを意識して授業に参加しているか。
 Q3. 授業の評価の観点（授業を通してつけたい力）を理解しているか。
 Q4. キャリア教育を通して身に付けたい力とされている中で「これから生きていく上で、あなたが特に大切だと思う力」は何だと思うか。
 ① 人間関係を築く力 ② 協力・協働して取り組む力 ③ 自分の興味関心・強み弱みを理解する力
 ④ 目標を持って自分の能力に磨きをかける力 ⑤ 時間やストレスを管理する力 ⑥ 課題や問題を把握する力
 ⑦ 問題解決に向けて行動する力 ⑧ 物事を多角的に見たり考えたりする力
 ⑨ 将来に向け具体的に目標設定する力 ⑩ 目標達成のために努力したり工夫したりする力
 Q5. この授業を通してあなたが特に身に付けたい力はどれか。
 ① コミュニケーション力 ② 文章にまとめる力 ③ 他者と協力する力 ④ 発表する力
 ⑤ 自分の興味関心を理解する力 ⑥ 振り返りによって自己を改善する力の情報収集力
 ⑦ 情報を整理・分析する力 ⑧ 自分で課題設定をする力 ⑨ 自分の将来を考える力
 Q6. 多様な他者の考えや立場を理解しようとしているか。
 Q7. 自分の考えが正確に相手に伝わるように工夫しているか。
 Q8. 周囲と力を合わせて話し合いや作業を進めているか。
 Q9. 地域のことに関心を持ち、自分のことにつなげて考えているか。
 Q10. 自分の興味や関心のあることを理解しているか。
 Q11. 自分の長所・短所を理解しているか。
 Q12. 自分の能力を高めるために、忍耐強く物事に取り組んでいるか。
 Q13. 知りたいことについて資料・情報収集し、分析して考えようとしているか。
 Q14. 問題点について、振り返って改善をはかろうとしているか。
 Q15. 働くこと（学ぶこと）の意義について理解しているか。
 Q16. 卒業後、社会の中で生きている（生きていく）自分をイメージしているか。

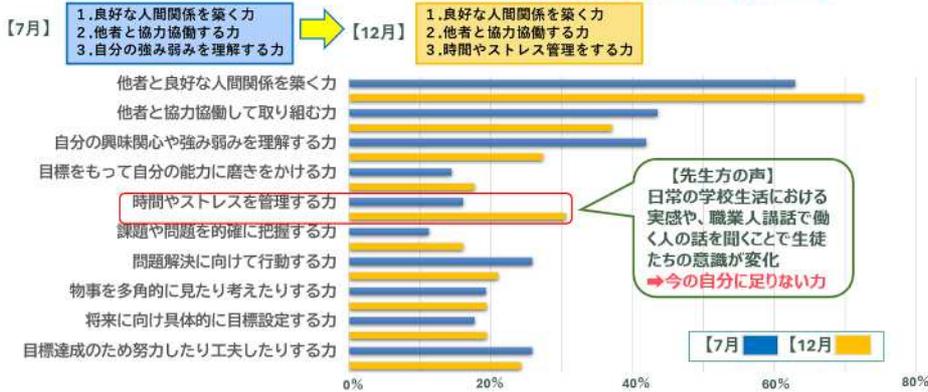
- 【12月選択：生徒】
 * 将来の目標（夢）に向かう気持ちはどのように変化したか。
 【12月記述：生徒】
 * 自分の将来を考える上で大事だと感じたのはどんなことですか。
 * 日常生活における自身のあり方について、変化したと感じることはありますか。
 【12月記述：教員】
 * 探究的な学びの要素のある教材を取り入れて【よかった/大変だった】点は何ですか。
 * この授業を通して得た力を、生徒が他の場面で生かしている姿が見られたら教えてください。
 * 今回の実践を通して、自身のやり方や考え方に変化や気づきがあったら教えてください。

資料2 アンケート分析1

アンケート分析1（生徒の変容）

生徒たちが社会を生き抜く上で大事だと考える力

生徒が重視するのは…他者との関係性



資料3 アンケート分析2

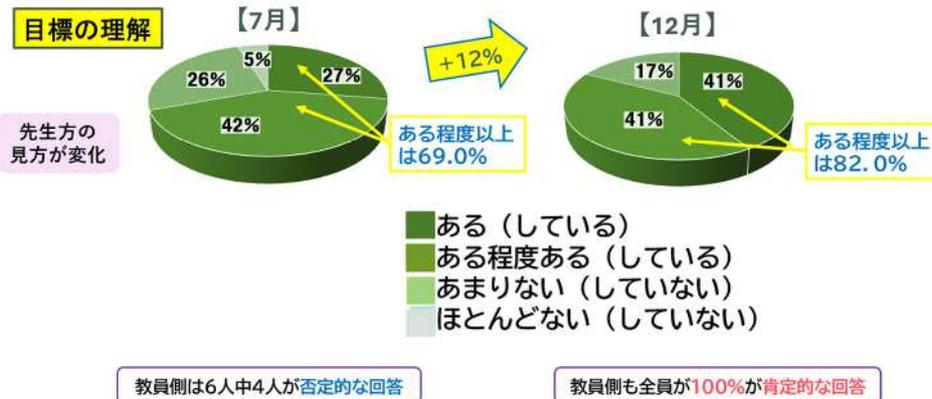
アンケート分析2（生徒の変容）

生徒たちが「産業社会と人間」の授業で身につけたい力



アンケート分析3 (生徒の変容)

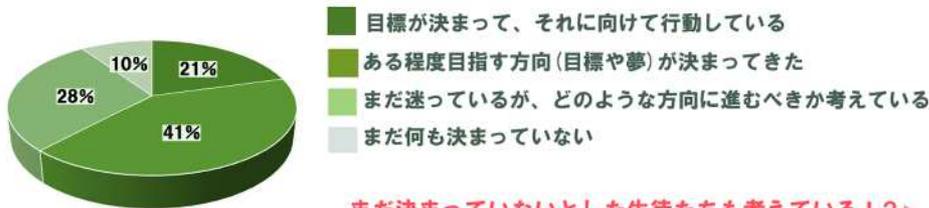
生徒たちが「産業社会と人間」の授業に向かう姿勢は…



アンケート分析4 (生徒の変容)

将来の目標(夢)に向かう気持ちはどのように変化したか

【12月アンケートより】



“生徒の90%以上が”
目標(夢)に向かって行動したり、
考えたりしている!

【決まっていないを選んだ生徒の記述より】

- * いろんなことを深く考えるようになった。進路についてよく考えるようになった。
- * 自分の得意を生かすようになった。
- * 自分にあった職業を考えることが大事。 など

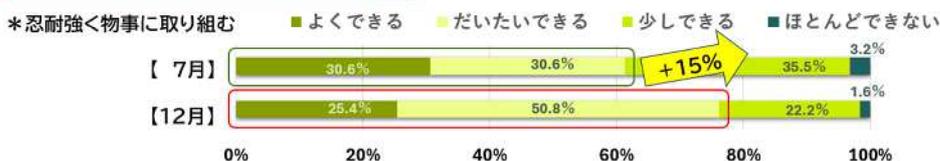
アンケート分析5 ～今後に向けての課題～

教師側からみた生徒が抱える課題

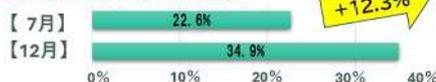
忍耐強く取り組む姿勢や振り返りにより改善する姿勢に課題

先生方による見取り ⇒ 7月・12月ともにこれらの姿勢には「課題あり」

一方、生徒のアンケート結果からは



* 問題点について、振り返って改善する
「よくできる」と回答した生徒の割合



教師側と生徒側の認識にズレ
今後の課題として対応